

1. 十六世紀～十七世紀の東アジア

画期としての十六世紀 現在の東アジア史の見識によれば、十六世紀前後の変動期から十七・十八世紀は、「今日にも繋がる国家の地理的・民族的枠組をつくり出した」画期として捉えられている。「それぞれの国の特徴をもつ制度や慣行の成立が、近代ナショナリズムとは違う形であれ、他国との対比における自意識の強化を伴」い、「華夷観の多元化」とも交錯しながら、いわば後の近代が克服の対象とした「伝統社会」が形成された時代なのだ、と¹。思想史にとっても、この見識は多くの示唆に富む。無論、理念が取り扱われる思想世界では、必ずしも実態と相即的に事態は進展せず、たとえば十五世紀までの明の冊封体制の隆盛が実態的な明中華主義を体現していたとするならば、それが朱子学的理念として受容されていくのは、「東辺」の日本ではむしろ十七世紀前半期であったとしなければならないが、それでもそれは豊臣秀吉（一五三六？—一五九八）の朝鮮侵略と明清王朝交替の影響もあって、早期より「日本型華夷思想」（日本を中華とした華夷思想）の要素が強く入り込んだものとならざるをえず、そこに徳川日本の独特の自他認識の成立が認められる²。朝鮮王朝における十七世紀以降の「朝鮮小中華主義」（朝鮮を中華とした華夷思想）の成立も、日本とは異なり既に十六世紀に朱子学が正統教学として確立していた事情もあるにせよ、それは朝鮮独自の自他認識の成立と捉えられる³。近代ナショナリズムとは、この華夷思想自体の解体を経て成立するものと捉えられるが、その構造には、これらの自他認識が「下敷き」のように埋め込まれているといわざるをえない⁴。いずれにしても、これらの日朝の

1 岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」『岩波講座世界歴史 13』岩波書店、一九九八年。なお、これと密接に関わる「大君外交」論、「海禁」論などについては、荒野泰典『近世日本と東アジア』東大出版会、一九八八年、ロナルド・トビ『近世日本の国家形成と外交』（速水融・永積洋子・川勝平太訳）創文社、一九九〇年、『朝尾直弘著作集 5』岩波書店、二〇〇四年、池内敏『大君外交と「武威」』名古屋大出版会、二〇〇六年、ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』小学館、二〇〇八年などを参照。

2 拙著『自他認識の思想史』有志舎、二〇〇八年。

3 河宇鳳『朝鮮実学者の見た近世日本』（井上厚史訳）ペリカン社、二〇〇一年、同『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』（金両基監訳、小幡倫裕訳）明石書店、二〇〇八年。

4 たとえば、華夷思想さらには儒学自体を完膚なきまでに解体して近代ナショナリズムの先鞭をつけたと捉えられる本居宣長（一七三〇—一八〇一）も、その尊大な日本宣揚の自身自体は、前世紀以来の日本型華夷思想論者の内容と大差はなかった。それ故、宣長を日本型華夷思想論者の延長線上に捉える議論がしばしば看取されるが、もとより儒学自体を

十七世紀以降の華夷思想のありようには、思想史的にも「伝統社会」の成立が認められるだろう。

ところで、日朝それぞれの自意識が強められていく直前、まさに十六世紀から十七世紀の移行期に一つの「事件」として起こったのが、姜沆（一五六七—一六一八）と藤原惺窩（一五六—一六一九）の出会いであった。従来は、日本朱子学の内側から、あるいは惺窩の思想形成に即して、それが徳川日本の朱子学成立に与えた影響関係として論じられることの多かったこの「事件」は、しかしながら前述してきた文脈に置くならば、きわめて興味深い「事件」であったといわなければならない。すなわち、そこには十六世紀までの東アジア世界の、やがてそれぞれそれを「下敷き」としながら、「日本型華夷思想」「朝鮮小中華主義」の形成に向かう、朱子学を媒介とした共時的な思想世界のスパークと、しかし十七世紀以降に大きな痕跡を留めるズレが認められるからである。したがって、この「事件」を理解することは、その後の十七世紀の明清王朝交替を経ての激変する相互の自他認識の変容を捉える意味でも、重要な意義を有しているといわなければならない。無論、その出会いは豊臣秀吉の朝鮮侵略のしからしめた、俘虜人として来日した姜沆にとってはきわめて不幸な事態の中で起こったことであった。だが、豊臣秀吉の朝鮮侵略についても、まさに明中華主義的世界が盛期を終えたことを受けての、北方女真族（のちの満州族）と並んでの辺境部の蠢動の一翼であったとするならば、それが同時に新たな十七世紀の胎動を内に孕むものであったことを、この姜沆と藤原惺窩の出会いは象徴的に示しているのである。

2. 姜沆の足跡とその日本観

姜沆の足跡 まずは、姜沆について、基本的な事項について整理しておきたい⁵。姜沆(강항)、

否定し、「固有言語」に依拠する宣長学の地平は、既に華夷思想自体を突き抜けたものであることは、いうまでもない。この点については、前掲拙著を参照されたい。なお、近代ナショナリズムの「下敷き」という捉え方は、大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、二〇〇七年に示唆を受けた。

⁵ 姜沆については、以下の文献を参照した。朝鮮総督府中枢院『朝鮮人名辞書』一九三七年（第一書房、一九七七年復刻）、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東大出版会、一九六五年、京都市『京都の歴史4』学藝書林、一九六九年、内藤雋輔『文禄・慶長役における被才虜人の研究』東大出版会、一九七六年、姜沆『看羊録』（朴鐘鳴訳注）平凡社（東洋文庫）、一九八四年、太田青丘『人物叢書 藤原惺窩』吉川弘文館、一九八五年、村上恒夫・辛基秀『儒者姜沆と日本』明石書店、一九九一年、村上恒夫『姜沆 儒教を伝えた虜囚の足跡』明石書店、一九九九年。金仙熙「再構成された近世思想——姜沆研究をめぐって」『広島大

字は太初、号は睡隱、全羅道靈光郡仏甲で生。代々著名な儒学者が輩出した名門の家系の出身として、一五八八年（宣祖二一＝天正一六）、進士となり、一五九三年に文科に登り、校書館博士などを経て工曹佐郎、刑曹佐郎となる。秀吉の再度の朝鮮侵略（一五九七年）に際しては、南原で軍糧供給の任につき、南原が陥落してからは義勇軍を召集するなどしたが、ついに藤堂高虎軍に捕縛され、日本に押送され、伊予大洲・大坂・伏見などに軟禁されて、一六〇〇年に釈放され帰国。帰国のための船の調達などにあたっては、藤原惺窩やその理解者でもあった播州竜野藩主城主赤松広通（一五六二―一六〇〇）、パトロンでもあり門人でもあった吉田（角倉）素庵（角倉了以の子、一五七一―一六三二）らの援助もあった。帰国後は、一旦は仕官したものの、自らを「罪人」と任じ、郷里にあって後進の指導にあたって没した。日本での俘虜生活の見聞録・報告書である『看羊録』は、没後に門人によって編纂され、『睡隱集』の中に収められて一六五六年に刊行された。

姜沆の主著は『睡隱集』のほか、編著として『綱鑑會要』『綱鑑大成』などがある⁶。畿湖学派（西人派）の重鎮である牛溪・成渾（一五三五―一五九八）に師事したが、畿湖学派は李珥（号は栗谷）（一五三六―一五八四）の流れをくむ一派で、十六世紀後半には李滉（号は退溪）（一五〇一―一五七〇）の流れをくむ嶺南学派（東人派）と対立していた（もっとも、李珥自体が李滉に師事しており、成渾もまた李滉の思想的立場に近かったと思われるので、一般的に指摘されているように姜沆を李滉の流れに位置づけることもあながち間違いではない⁷）。十六世紀前半に士林派は王朝要路の掌握に成功し、朱子学は朝鮮王朝の体制教学としての地位を確立するに至ったが、それと同時に現実的な政治路線に規定された党争が激化しており、畿湖学派と嶺南学派の対立はその最初のものであった⁸。成渾に

学教育学部紀要』第二部四八号、一九九九年。

⁶ 姜沆の著書については、『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隱集』民族文化推進会（ソウル）、一九九一年、高麗大学校図書館蔵版本（一九五六年跋）、編著としては『綱鑑會要』高麗大学校蔵版本（刊行年未詳）、『綱鑑大成』（同前）などを参照した。また、朝鮮王朝期の思想史については、裴宗鎬『韓国儒学史』延世大学校出版部（ソウル）、一九七四年、玄相允『朝鮮儒教史』玄音社（ソウル）、一九八二年、李丙燾『韓国儒学史略』亜細亜文化社（ソウル）、一九八六年、李泰鎮『朝鮮王朝社会と儒教』（六反田豊訳）法政大出版局、二〇〇〇年、姜在彦『朝鮮儒教の二千年』朝日新聞社、二〇〇一年、河宇鳳『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』（前掲）などを参照した。

⁷ 姜在彦『朝鮮儒教の二千年』（前掲）など、姜沆を李滉派とするものが多いが、正確には「学統」は異なるものの思想内容的に近い立場であったとすべきであろう。

⁸ 李泰鎮がのべるように（前掲『朝鮮王朝社会と儒教』）、こうした党争を不毛なものとして、それが朝鮮朱子学の特性、あげくは朝鮮王朝の属性であるかのように描き出すことには、植民地時代の日本側の史観が大きく作用しているといわなければならない。李はまた、士林派が古代的な貴族層と鋭く対立しながら成長してきた中小地主層の利害を体現し、権

関していえば、学派内部で李珥と六年間に及ぶ理気をめぐる論争をしており（「四七理気論争」⁹）、李珥の「気発理乗」とする主氣的立場に対しては、主理的立場であった。姜沆がこれに対して、どのような立場であったのかは管見のかぎりでは知りえないが、門人が「詩を姜沆から学んだ」としていることから（『綱鑑會要』序文、尹舜挙〔一五九六—一六八八〕）¹⁰、姜沆のもっとも得意とするところは詩であったと思われ、帰国後は党争を嫌って在野で教育活動に専念したと伝えられていることを加味するならば、形而上学的論争については積極的ではなかったのではないか。「存心養性説」には次のような姜沆の主張が見えるが、穏当な朱子学的心性論とすべきであろう。

天ノ命ズルヲ性ト為ス。中ヲ主ドルヲ心ト為ス。是ノ心無ケレバ則チ以テ一身ノ宰タル無シ。是ノ性無ケレバ則チ以テ万物ノ靈タルコト無シ。然ルニ心ハ即チ活物也。危フク動キテ安スルコト難シ。故ニ心ノ操存ヲ待チテ後、乃チ曲当ニ泛応シ、而シテ天君泰然、百体令従セリ。性ハ即チ天理也。微妙ニシテ見ルコト難シ。故ニ必ス涵養ヲ待チテ後、乃チ義精仁熟シテ徳性常用シ物欲行ハレズ。蓋シ心ヲ存スルニ非ザレハ、以テ性ヲ養フ無シ。而シテ性ヲ養フ者ハ又以テ心ヲ存セザルベカラズ。学問之道ハ他無シ、心ヲ存シ性ヲ養フノミ（『睡隠集』別集）¹¹。

姜沆の日本観 ところで、姜沆『看羊録』で注目されるのは、その日本観であろう。とりわけ、それは朝鮮王朝にあっては広く読まれ、李晬光（一五六三—一六二八）『芝峯類説』、李瀾（一六八一—一七六三）『星湖塞説』、安鼎福（一七一二—一七九一）『東史綱目』、李徳懋（一七四一—一七九三）『蜻蛉国志』などの重要参考図書となり、通信使たちも案内書

力の掌握に成功したことは、朝鮮王朝が近世的社会として確立したことを示しており、そこで正統教学として確立した朱子学＝性理学とは、権力の偏在を否定し、道学的政治を目ざすものとしてあったこと、内部の形而上学的な論争にも、確かに弊害はあったものの基底には現実の政治路線をめぐる分岐（門閥的な貴族層との関連でいえば、もっとも強く気排斥を主張した東人派の南冥学がそれと対決的で、間に李滉をはさみ、理通気局論の李珥、理気一発論の成渾が現状妥結的だったという）が存在しており、むしろ相互補完的なものであったことを明らかにしている。

⁹ この論争は、李滉と奇大升（一五二七—一五七七）の間での「四端七情論争」を直接引き継ぐもので、両者とも現在の韓国でも歴史知識としてよく知られている論争である。李滉は「四端理発而気随之」「七情気発而理乗之」として理気二元論の上で主理的立場をとった。これらの論争については、裴宗鎬『韓国儒学史』（前掲）に詳しい。姜沆の編著『綱鑑會要』に序文を寄せた弟子の童土・尹舜挙（一五九六—一六八八）は、学問を成文濬（一五五九—一六二六）に、詩を姜沆に学んだとしていることも、その傍証となるだろう。

¹⁰ 姜沆の編著『綱鑑會要』に序文を寄せた弟子の童土・尹舜挙（一五九六—一六八八）は、学問を成文濬（一五五九—一六二六）に、詩を姜沆に学んだとしている。

¹¹ 『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隠集』（前掲）一六三頁、原漢文。

として利用していたことを考えると¹²、十七ー十八世紀朝鮮の日本観の原型として位置づけられるだろう。具体的には、「賊中封疏」では、日本の歴史、地理、天皇と関白、日本の文字、宗教、朝鮮侵略に参加した将、軍事制度と戦術、築城技術、武器、一般人の生活・習俗などが詳細に記され、さらに「倭国百官図」「倭国八道六十六州」では、官職、地誌が克明に記録されている。いずれも具体的、かつ正確なもので、これによって、少なくとも徳川幕府成立以前の日本に関する基本的知識が、朝鮮側知識人に提供されていたことは間違いない。

ここで注目しておきたいのは、秀吉の朝鮮侵略によって、当然ながらその評価は概して否定的なものとなっていることである。とりわけ、下剋上の状況、それによって実権を掌握した秀吉、礼の不在、漢字への将の無知などについては、自らの家族が秀吉軍によって殺された憤りもあろうが、それ以上に儒家知識人の矜持からする否定的評価が下されている。

秀吉奴隸ヨリ崛起シ、諸大臣ヲ攻メ殺シ、自ラ關白ト稱シ、其國王ヨリ四大姓ヲ受ケンコトヲ請フ。王所ニ在ル者、皆ナ曰ク、餘事、惟タ公ノ姓ハ許ルスヘカラズ、ト。賊魁、恚リテ退ク。自ラ平氏ト稱シ、其ノ後又豊ト改メル。今之レ當路ノ者、皆庸奴市兒ニシテ、秀吉ノ卒ニ富貴ヲ託ス者也。倭僧ノ稍ヤ識有ル者ハ皆曰ク、日本有リテヨリ以來、未タ此ノ時ノ如キ顛倒ハ有ラザル也。

(秀吉は)性ハ甚タ姦猾ニシテ、専ラ謔浪笑傲ヲ以テ羣下ヲ戲玩シ、家康等ヲ侮弄スルコト嬰兒ヲ弄スル如シ。又喜ヒテ沽醬賣餅之状ヲ爲シ、家康等ヲシテ行人買得之態ヲ作サシメ、一文三鎰ノ戲、計較ヲ爲ス。又専ラ權謀術數ヲ以テ諸將ヲ制馭ス。其ノ相稱號スルニ、或ハ様ト曰ヒ、或ハ殿ト曰フ。關白ヨリ庶人ニ至ルマデ之ヲ通用ス。夷狄ノ等威無キコト此クノ如シ。

其ノ所謂ル將ナル者ハ、一人トシテ文字ヲ解スル無シ。其ノ使フル文字ハ、我國ノ吏讀ニ酷似ス。字之本義ヲ問ヘハ、則チ邈然トシテ知ラズ。武經七書ハ、人皆印藏ス。而シテ亦未タ半行ヲ通讀スル者有ラズ(以上『看羊録』)¹³。

ところで、こうした評価は、無論朱子学的な価値、あるいはそれが備わっている朝鮮、という視点からなされているものであることが看過されてはならない。姜沆のものではないが、恐らく四書五経の浄書中に惺窩が行った朝鮮人との筆談の中に以下のような記述がある。

¹² 河宇鳳『朝鮮実学者の見た近世日本』(前掲)五八頁。

¹³ 『影印標點韓國文集叢刊 73 睡隱集』(前掲)九三、一一七、一二五頁、原漢文。

汝ノ国何ニ因リテ委靡振ハザルコト斯克ノ如キカ。日本国ノ人ノ智謀異ナルヤ、将ニ汝ノ国王不善ノ行有リテ此クノ如キヤ（後略）（肅＝惺窩のこと）。

我ガ国ノ兵ノ多少、国ノ広狭、人ノ強弱、日本ト異ナル無シ。而シテ我ガ国二百年來、礼義廉恥ヲ備ヘ、攻戦ノ備ヲ修メズ。辺守ノ将、皆是レ儒生ニシテ、弓一破ヲ操ル能ハズ（中略）。我レ文武ニ敏ナラズト雖モ、豈礼義ヲ知ラザランヤ。昔ハ文武ノ時、中興ノ君一二ニ非ズ（鮮人＝恐らく少年）（「朝鮮役捕虜との筆談」）¹⁴。

ここには、朝鮮侵略に遭遇した慚愧と同時に、やはり「礼義廉恥」を備えていることに対する矜持が厳然と看取されよう。そして、姜沆が惺窩らを高く評価したのも、「古文ヲ解シ、書ニ於ヒテ通ゼザル無シ」だからであった。

小臣倭京ニ來リテヨリ、倭中ノ虚實ヲ得ント欲シ、間日ニ倭僧ト相接スルニ、其ノ中ニ文字ヲ解シ、事理ヲ識ル者無キニアラズ。醫師意安理安ナル者有リ。數來リテ小臣ヲ琅璫中ニ見、又妙壽院僧舜首座ナル者有リ。京極黄門定家之孫ニシテ、但馬守赤松左兵衛廣通ノ師也。頗ル聰明ニシテ古文ヲ解シ、書ニ於ヒテ通ゼザル無シ。性ハ又剛峭ニシテ、倭ニ於ヒテ容ルル無シ。内府家康其ノ才ノ賢ナルヲ聞キ、倭京ニ室ヲ築キ、歳ニ米二千石ヲ給スルニ、舜首座ハ室ヲ捨テ居ラズ（『看羊録』）¹⁵。東ノ人宋賢有ルヲ知ラズ。惟タ斂夫出デテ之ヲ表ス。是ノ斂夫無ケレバ則チ宋賢無キ也。斂夫ノ志、赤松ニ非ザレバ成ス能ハズ（「五経跋」）¹⁶。

そして、先にのべたように、『看羊録』の影響力が大きかったこともあって、この姜沆の提示した日本観は、概ねにおいて十七ー十八世紀の朝鮮王朝の日本観として定着していくこととなる。すなわち、朱子学的文化基準から見ての「夷狄」としての日本観と、同時に同じ基準に照らしての少数の知識人に対する肯定的評価である¹⁷。秀

14 『藤原惺窩集』下、思文閣出版、一九七八年〔初刊は一九四一年〕、三七二頁、原漢文。

15 『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隱集』（前掲）一二〇頁、原漢文。

16 『藤原惺窩集』上（前掲）、二九九頁、原漢文。林羅山（一五八三ー一六五七）は、後に「惺窩先生行状」で、やや大げさではあるが、姜沆は「日本国ニ斯ノ人有ルヲ喜ヒ俱ニ談スルコト日有リ。沆曰ク、朝鮮国三百年以來、此クノ如キ人有ルハ吾レ未タ之ヲ聞カザル也」といったとしている（「林羅山文集」卷第四十、『林羅山文集』弘文社、一九三〇年、一九頁、原漢文）。

17 たとえば、姜沆の『看羊録』を重要な参考書としていた安鼎福は、「館ヲ置キ倭ト接ス。是レ王者懷綏之大徳ト雖モ、終ヒニ介鱗ヲシテ我ガ衣裳ト混ジセシメ、末梢ニハ繁殖シ、中宗庚午、明宗乙卯之變有リ」として、日本を「介鱗＝夷狄」とし警戒を露わにしているが、他方では伊藤仁斎や山崎闇斎についてはその見識を高く評価している（『順庵先生文集』『国訳順庵集』二所収、民族文化推進会〔ソウル〕、一九九六年、原漢文）。これらについては、李豪潤「一八世紀における朝鮮王朝の自他認識」『日本思想史研究会会報』二〇号、

吉の侵略に対する激しい憎悪も、姜沆ほど直接的ではないにしても「記憶」として継承され、姜沆が日本の軍事技術や築城技術を高く評価していたことは、むしろ警戒感として継承されていくこととなる。姜沆は、その意味でも十七世紀以降の日朝関係に重要なインパクトを与えた、ということになる。

3. 藤原惺窩と明中華主義との遭遇

藤原惺窩の足跡 藤原惺窩は、姜沆とは、伏見軟禁中の一五九八年に、医師理安（生没年不詳）、そしてその師である吉田意安（？—一六〇〇）を介して出会い、その後一年半余り親交を深めることとなる。この間に惺窩は、姜沆に四書五経その他の筆写を依頼し、『文章達徳録綱領』などの序跋・識語も執筆してもらっている¹⁸。何よりも大きかったことは、この姜沆が書写した四書五経に、惺窩は「宋儒学之意」をもって訓点を加え、それがやがて「惺窩加点本」として徳川日本における朱子学興隆の一つの基礎となったことである¹⁹。無論、この事業については、姜沆以外にも、惺窩が大名は全て「盗賊」だが、唯一「盗賊」ではなく「惟タ頗ル人心有り（中略）。篤ク唐制及朝鮮ノ禮ヲ好ミ、衣服飲食ノ末節ニ於テモ、必ス唐與朝鮮ニ效ハントス。日本ニ居ルト雖トモ、日本人ニ非サル也」（『看羊録』²⁰）と評した赤松広通（一五六二—一六〇〇）の援助があったことも、よく知られているとおりである。

ところで、惺窩が儒学・朱子学に触れたのは、仁如集堯（一四八三—一五七四）や文鳳宗韶（生没年不詳）といった禅僧を通じてであったが²¹、儒学・朱子学に大きく傾斜するに至ったのは、一五九〇年（天正一八）に朝鮮信使として来日した黄允吉（一五三六—？）、金誠一（一五三八—一五九三）、許箴之（一五四八—一六一二）らと大徳寺で出会ったことに契機があると考えられる²²。さらに、秀吉の朝鮮侵略（文禄の役＝壬辰倭乱）をはさみ、その講和のために来日していた明国国使謝用梓（生没年不詳）、徐一貫（生没年不詳）と肥

二〇〇三年を参照。

¹⁸ この点は阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（前掲）に詳しい。

¹⁹ 「手簡 問姜沆」（『惺窩先生文集』卷之十、『藤原惺窩集』上〔前掲〕、一三六頁、原漢文）。ただし、「惺窩点」については、四書のものには確かなものは存在せず、五経についても不明な点が多い。また、「宋儒之意」としながらも、五山禅儒の系譜を引く惺窩には、古点との混交も認められるという。これらについては、村上雅孝『近世初期漢字文化の世界』明治書院、一九九八年に詳しい。

²⁰ 『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隠集』（前掲）一二〇頁、原漢文。

²¹ 太田青丘『人物叢書 藤原惺窩』吉川弘文館、一九八五年。

²² 今中寛司『近世日本政治思想の成立』創文社、一九七二年。

前名護屋で会っているが、そこでは、「大明ハ昔日聖賢ノ出タル国也。予ヲ以テ之ヲ想像スルニ、文武兼備シ、智勇双全シ、朝鮮モ亦其風ヲ慕ヒ、其命ヲ奉スル国也」とする「質疑草稿」を著し、さらに「四海一家、遠方ニ非ズ、大明高客忽チ梯航ス」という七言絶句を詠んでいる²³。こののち惺窩は渡明を試みて失敗するが（一五九六—一五九七年）、これらからは惺窩の儒学への志は、明・朝鮮への強い憧憬と不可分のことであったことが分かる。換言するならば、惺窩を儒学・朱子学へと引きつけたのは、戦乱の日本への強い嫌悪ともあいまっての（秀吉は、「意気豁如、度量寛大タルモ、細行ヲ治メズ、小恥ヲ悪マズ、小節ヲ守ラズ、人ノ諫ヲ聴カズ、心ノ欲スル所ノママニシテ、全ク凡庸流ニ殊ナラズ。（中略）斯ノ如キ小国ノ常人」と捉えられ厳しく批判されている²⁴）、明中華主義の「文化力」であったといってよいだろう。姜沆との出会いは、このように考えると、まさに惺窩にとって、儒学・朱子学へと転回する決定的な役割を果たすものとなったことは、想像に難くない。しばしば取り上げられるものではあるが、惺窩は「問姜沆」で次のようにのべている。

予幼ヨリ師無ク、独り書ヲ読ミテ自ラ謂ヘラク、漢唐ノ儒者ハ、記誦詞章ノ間、纔カニ音訓ヲ註釈シ、事迹ヲ標題スルニ過ギズ、決シテ聖学誠実ノ見識無シ、ト。（中略）若シ宋儒無ケレバ、豈聖学ノ絶緒ヲ続ガンヤ。然リト雖モ日本闔国既ニカクノ如シ。（中略）故ニ赤松公、今新タニ四書五経ノ経文ヲ書シ、予ニ請ヒテ宋儒ノ意ヲ以テ倭訓ヲ字傍ニ加ヘ、以テ後学ニ便セント欲ス。日本ノ宋儒ノ義ヲ唱フル者、コノ冊ヲ以テ原本トナサン²⁵。

これは、惺窩から姜沆に提示されたものであるが、姜沆との出会いによって、日本の朱子学が出発することになった自負と感慨が、率直にのべられた文章といえる。

藤原惺窩の普遍主義 かくて儒学者・朱子学者としての立場を確立した藤原惺窩の思想については、ここで詳しくのべることはできないが、二点だけ指摘しておきたい。一つは、既にのべたことではあるが、その思想には、明・朝鮮への「文化力」に対する強い信頼が認められる、ということである。それは、明・朝鮮という王朝に対する信頼というよりも、そこに普遍的価値が存在していることに対する確信がしからしめたものであったといえる。惺窩の次の文章は、そうした普遍主義を鮮明に物語るものである。

五方ノ皆殊ナラザル所以ハ、コノ性ナル者カ。コレニ由リテコレヲ見レバ、則チソノ同

²³ 『藤原惺窩集』下（前掲）、三六七頁、及び六三頁、原漢文。

²⁴ 同前三六七頁。

²⁵ 『藤原惺窩集』上（前掲）、一三五—六頁、原漢文。

ジカラザル者ハ、タダ衣服言語ノ末ナルノミ（「致書安南国代人」²⁶）。

異域ノ我が国ニオケルハ、風俗言語異ナリトイヘドモ、ソノ天賦ノ理ハ、未ダ嘗テ同ジカラズンバアラズ（「舟中規約」²⁷）。

理ノアルコト、天ノ幃ハザルナキガ如ク、地ノ載セザル無キニ似タリ。コノ邦モマタ然リ。朝鮮モマタ然リ。安南モマタ然リ。中国モマタ然リ。東海ノ東、西海ノ西、コノ言ハ合ヒ、コノ理ハ同ジ。南北モマタ然ルガ如シ。コレ豈至公至大至正至明ニアラズヤ（「羅山先生文集」²⁸）。

これらには「性」「天賦ノ理」の普遍性に対する揺らぎない惺窩の確信がみなぎっている。そして、姜沆に「惜シイカナ。吾レ大唐ニ生ル能ハズシテ、又不得生朝鮮ニ生ヲ得ズ、日本ノ此ノ時ニ生トハ」（『看羊録』²⁹）とのべ、弟子の林羅山（一五八三—一六五七）に対して「ああ、中国に生れず、またこの邦の上世に生れずして当世に生る。時に遇はずと謂ふべし」とのべたと伝えられているように（「羅山先生文集」³⁰）、惺窩は、その普遍性の中心（中華）と映じた中国・朝鮮に強く惹かれていたのである。

第二に、こうしたことと表裏することであるが、惺窩には戦乱の続く日本の現状に対する強い危機感と批判があった。惺窩は姜沆に対して、「日本生民ノ憔悴。未ダ此時ヨリ甚ダシキ時ハ有ラズ。朝鮮若シ能ク唐兵ト共ニ、弔民伐罪セントスレバ、先ズ降倭及ヒ舌人ヲシテ、倭諺ヲ以テ榜ヲ掲ゲ委ヲ知ラシメ、以テ水火ヨリ民ヲ救フノ意ヲ示セバ、師行ノ過ギル所、秋毫モ犯サザレバ、則チ白河關ト雖モ至ルベシ」（『看羊録』³¹）とのべたという。秀吉を初めとする武将を「盗賊」とのべていたことは先にのべたが、これらは惺窩の眼にも「夷狄」さながらの状況と映じていたのである。ただし、それは惺窩にとって嘆くことをのみ意味するものではなく、「小人乱世の我におけるや、磨なり、涅なり、他山の石なり。皆我を励ますものなり」と捉えられていた（「羅山先生文集」³²）。惺窩の朱子学・儒学者としての自立は、こうした緊張関係の中でなされたものであった。

26 同前、一二五頁、原漢文。

27 同前、一二六頁、原漢文。

28 『林羅山文集』（前掲）、三四八頁、原漢文。

29 『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隱集』（前掲）一二〇頁、原漢文。

30 『林羅山文集』（前掲）、三四六頁、原漢文。

31 『影印標點韓国文集叢刊 73 睡隱集』（前掲）一二〇頁、原漢文。

32 『林羅山文集』（前掲）、三四六頁、原漢文。

4. そして十七世紀へ

明清交替と思想の変容 徳川時代の儒学・朱子学の確立としての儒学者惺窩の、五山禅学からの離脱の表徴としては、通常は一六〇〇年に惺窩が深衣道服して徳川家康に謁したことが取り上げられることが多いが、それはまさに姜沆が帰国して直後のことであり、したがって惺窩の自立、引いては徳川儒学の成立に姜沆が大きな影響を与えたと解することは、あながち間違った理解ではない。まさしく姜沆の援助もあって、ここに徳川儒学は大きな一歩を踏み出したのである。

だが、朝鮮王朝と徳川日本のその後の歩みは、この両者の個別の思いをとおりこえたところで転回し、それは十七―十八世紀の東アジアの思想空間にも微妙な変調を与えていくこととなる。朝鮮側の日本観が、夷狄観を基調とするものであったことは既にのべたが、それは確立して間もない正統派の朝鮮朱子学に映じた武国日本像であって、豊臣秀吉の朝鮮侵略もあって多少は感情的な面もあったであろうが、姜沆に即していうならば朱子学的「礼義」に照らしての冷静な判断の側面もあった。だが、朝鮮王朝は、一六二七年には後金（のちの清）の侵略を受け（丁卯呉乱）、明清王朝交替へと続く動乱の渦中に巻き込まれていくこととなる。その過程で、「崇明排清論」や宋時烈（一六〇七―一六八九）の「北伐論」などが台頭し、「朝鮮中華主義」の思想が強化されていく。それはまた、日本夷狄観が理念的にも強化されていくことを意味していた。姜沆の『看羊録』は、こうした日本夷狄観の重要な参照文献になっていくことについては、既にのべたとおりである。朝鮮通信使にも、そうした夷狄観からする観察が一貫していたのである。

徳川日本では、戦国時代から遠ざかるにつれ、惺窩に見られたような現状批判は後退していく。林羅山には、朱子学者としては惺窩同様の朝鮮への信頼が見られるが、官吏としては既に朝鮮朝貢国観も見られる³³。ここには、現状肯定的になっていくにつれ、朝鮮朝貢国観が見られるようになっていく原型のようなものが窺える。明清王朝交替についていえば、それは朝鮮王朝ほどの直接的な影響を与えるものではなかったものの、やはり「明が夷狄に替わられた」という衝撃は大きく、儒学者の中には「朝鮮中華主義」ばりの「日本型華夷思想」「日本中華主義」を唱えるものが増えていく（山鹿素行、熊沢蕃山、山崎闇斎学派など）。こうした思想は、十八世紀には広く一般化し、朝鮮との「誠信外交」で知られる雨森芳洲（一六六八―一七五五）ですら「日本型華夷思想」の影響を免れなかつ

³³ 三宅英行『近世アジアの日本と朝鮮半島』朝日新聞社、一九九三年。

た³⁴。

もつとも、惺窩が示した明中華主義にたった普遍主義は、儒学・朱子学ではいわば遺伝子のようなものとして組み込まれており、儒学・朱子学者のほとんどはその影響下にあった。十八世紀に明からの亡命者などの影響で「明風」が流行したのも、その現れである³⁵。ただし、朝鮮観については、明同様に崇拝していた惺窩とは異なった段階を迎えていたといわなければならない。こうして、互いに夷狄視する傾向が構造化した中で、日本と朝鮮は近代を迎えることとなるのである。

史料

『影印標點韓国文集叢刊七三睡隱集』民族文化推進会（ソウル）、一九九一年。

『睡隱集』高麗大学校図書館蔵版本（一六五六年跋）。

『綱鑑會要』高麗大学校蔵版本（刊行年未詳）。

『綱鑑大成』同前。

『看羊録』（朴鐘鳴訳注）平凡社（東洋文庫）、一九八四年。

『藤原惺窩集』上下、思文閣出版、一九七八年〔初刊は一九四一年〕。

『林羅山文集』上下、弘文社、一九三〇年。

³⁴ 拙著『自他認識の思想史』（前掲）。

³⁵ 『中村幸彦著述集』七、中央公論社、一九八四年。